

地方の常識

地域特性を活かした独自規格

第7回

PiTaPa 異彩を放つ ポストペイICカード



写真1 PiTaPaベーシックカードとLOTTE PiTaPaカード

S uica (JR東日本) やICOCA (JR西日本) など、大都市圏を中心にIC乗車券で自動改札機を通り抜ける風景はすっかりおなじみになったが、チャージ料金が足らずに恥ずかしい思いをした方も多いのではないだろうか。悪いことをした

わけでもないのに警察に取り押さえられたような、あの居心地の悪さを感じたことのある方は、ぜひ関西へ来てほしい。関西にはひと味違うIC乗車券、PiTaPaがある。PiTaPaは(株)スルッとKANSAIが提供しているIC決済サービスである。

ポストペイ方式の違いはお金を先に払うか後に払うかだけのように思われるかもしれないが、システムとしては、実はかなり大きく異なる。ユーザーは、面倒なチャージが必要なく、またチャージ不足の心配がないほか、電車のバス利用回数や利用額に応じて運賃が割引される、といったサービスを受けることができる。また、定期券を買ったものの、予期せぬ長期出張や長期入院で使えなかった場合に大きく損をしようというリスクを回避するために、請求金額の上限を定期券相当額に設定したうえで、実際の利用額に応じて請求される登録型割引サービスを導入している交通事業者もある。これなども損得勘定にうるさい関西人の心をくすぐるのかもしれない。

事業者が乗り入れていても、料金やサービスを各事業者で自由に変更できる。このような緩やかな枠組みによって、関西地区のほとんどの交通事業者(鉄道20社局、バス19社局)がPiTaPaを導入し、ユーザーの利便性を高めている。ポストペイ方式の長所を最大限に活かした事例として、韓国と協同し、交通ICカード利用額をウオンで決済可能にした「LOTTE PiTaPaカード」がある。このカードをもつて関西空港に着いた韓国の観光客は、切符を買わずに電車に乗って大阪の都心部で買い物をする、ということがすでにできるようになっている。日本の観光立国実現のためにも、PiTaPaは大きな可能性を感じさせる1枚といえるのではないだろうか。

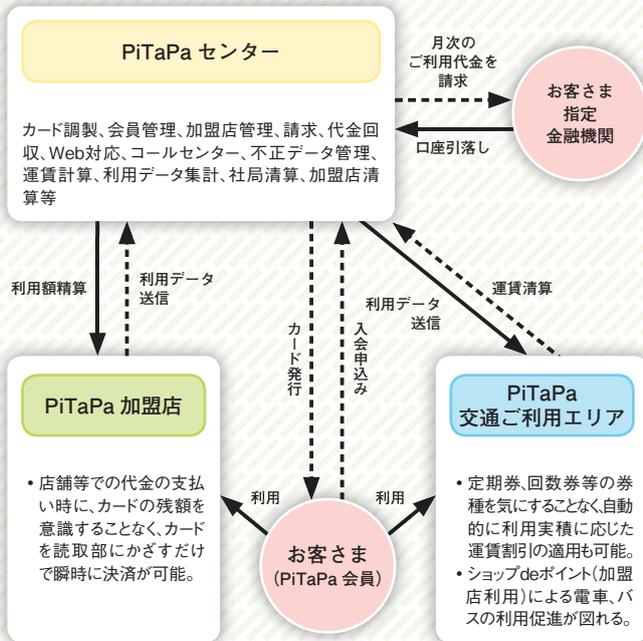


図1 PiTaPaカードの仕組み

「Postpay IC for Touch and Pay」の頭文字を取ったものだが、関西人には「ピ」タツと「タ」ツチするだけで「バ」ツとスピーディーに、このキャッチフレーズの方が馴染みがある。その最大の特長は、1ヶ月の電車・バスの利用代金が、後日、指定口座から引き落とされるというポストペイ方式にある。プリペイド方式と

事業者としても、チャージや運賃の不足という概念が存在しないので、精算機やチャージ機の設備投資を抑制できるほか、1ヶ月の利用実績を交通事業者ごとに分類した後で割引の設定ができるため、複数

水谷 聡 編集委員
(写真提供・取材協力…(株)スルッとKANSAI)

参考文献 <http://www.pitapa.com/>